地域社会から学ぶ

経営学部教授　松岡紀雄

経営学部の松岡ゼミ生が、地域社会と深い関わりを持つようになったのは2000年のことである。私が平塚市の総合計画審議会会長や情報化プラン策定委員長をしていた縁から、平塚商工会議所の中心市街地活性化委員会高度情報化研究会座長就任の要請を受けた。この研究会の議論のなかで中心商店街のホームページ開設が不可欠となり、松岡ゼミ生がチャレンジしてみようということになったのである。

ゼミ生たちは、平塚中心街の商店の取材協力を得て約80店のホームページを制作、「湘南ひらつか e-タウン」と名付けて臨時のサイトを開設した。出来栄えはともかくとして、松岡ゼミ生にこうした取り組みが出来た背景には、その2年前から当時ゼミの4年生だった田中千夏さんの尽力で「松岡紀雄教授のページ」というサイトを開設し、以来ゼミ生がひとり残らず自分のホームページを制作して公開していたことがある（http://matsuoka007.com/このトップページから、本文で紹介する各サイトにアクセスすることができる）。

▲七夕まつりで地域通貨の盛り上げ（2005年）

出来上がったホームページを見た商工会議所の松上茂会頭ら幹部の方々が、このままにしておくのは勿体ないと、平塚市の共催も得て、ひらつか市民プラザで「神大生の手づくり平塚商店街ホームページ展」を開催することになった。2001年6月のことである。約1千名の方々が会場を訪れ、神奈川新聞には1面トップ記事や社説にまで取り上げられた。1週間の展覧会開催中、ゼミ生がパソコンを操作しながら来場者への説明役を務めたことは言うまでもない。

翌年のゼミ生は、人口3万人の二宮町の商店のホームページ制作に挑戦、「さわやかタウン二宮」を開設した。この折には、松岡ゼミの2期生で、二宮町でコンピュータ関連の仕事をしている新海貴弘さん（非常勤講師も兼務）も大きな役割を果たしてくれた。

こうした松岡ゼミ生の活動を知って訪ねて来られたのが、キャンパスに隣接する土屋小学校の当時PTA会長と自治会長である。土屋のホームページも制作してほしいということだが、文字通り大学全体がお世話になっている地域の方々のご依頼である。経営学部の3期生で、当時非常勤講師としてコンピュータ関係の授業も担当していた今野克義さん（現参議院議員秘書）の全面的な協力を得て、「ふるさと土屋」のサイトを立ち上げた。

松岡ゼミ生は、創立130余年という歴史のある土屋小学校や、大学周辺のお店や医院、木工所などのホームページ制作にあたった。土屋の旧家7軒を訪ね、土蔵に保管されたお宝をデジカメで撮影して紹介するといった活動にも取り組んだ。自治会や公民館、サークル活動なども紹介したことは言うまでもない。

学生の宿命として、毎年先輩から後輩にバトンタッチしていかなければならない。この4月から5代目ということになるが、委員は毎月1回小学校のパソコン教室で開かれる運営委員会（代表は木村植物園社長の木村義広さん）に出席、校長先生やPTA会長、幼稚園長、公民館主事らと打ち合わせを行っている。小学校や幼稚園の運動会や卒業式、ドッジボール大会や少年野球の試合などにもデジカメを手に駆けつけ、新聞記者のような気分になって取材を重ねている。毎年2月に開催される土屋公民館まつりでは、ロビーに数台のノートパソコンを並べ、地域の方々にホームページを見ていただく取り組みも続けている。

▲妙圓寺を舞台に21世紀型寺子屋を開催（2006）

平塚と言えば湘南ひらつか七夕まつりだが、2005年の七夕まつりでは松岡ゼミ生が大きな話題を提供した。全国市民活動まつり実行委員会や商店街連合会と一緒になって、市内の有力店で利用できる地域通貨を発行したのである。ゼミ生が中心商店街のお店を回って60店以上から地域通貨利用の協力を取り付け、実質的に5％引きで食事や買い物ができるようにした。七夕に因んで「タナー」と名付けた地域通貨を演習室で制作している様子や、中国人留学生が市内のお店を訪ねて協力を要請している様子が地元のテレビ局によって撮影され、七夕まつり当日の特別番組で放映された。この地域通貨の活用に、松岡ゼミの卒業生が全国各地から応援の手を差し伸べてくれたのは何よりの励ましであった。

地域通貨が当時の3年生を中心に行われる傍らで、4年生が取り組んだのは市内の小学生によるドッジボール大会と、小学生が描く七夕の絵の展覧会の開催である。320点以上の作品が集まり、それらを七夕まつりで賑わう店舗や中央公民館に展示した。

2005年、6年の両年の秋に開催した「21世紀型寺子屋」についても触れなければならない。土屋小学校の児童20余名の参加を得て、キャンパスの近くにある里山と妙圓寺を舞台に、一日寺子屋を開催した。小学校の先生方や父母はもちろん、老人会や婦人会、老人施設の土屋ホーム、里山をよみがえらせる会、昼食の野菜を提供してくれる農家の皆さんなどと、3ヵ月以上にもわたる綿密な打ち合わせや準備をして実現にこぎつけた。終了後には、写真をふんだんに盛り込んだ詳細な報告書を作成、関係者へ感謝の気持ちを込めてお届けした。寺子屋に参加した小学生からは手づくりのびっくり箱を添えた感謝状が贈られ、土屋ホームの90歳のおばあちゃんからも、心あふれる礼状をいただいた。1年目に徹夜で作成した記録ビデオは、藤沢市で開かれた映像祭で審査員特別賞を受賞したりもした。こうした活動を成し遂げた学生の姿は、私の目にも眩く見えたものである。

妙圓寺は、大学の正門からわずか300メートルの位置にある由緒あるお寺である。池田正顕住職やご家族の方々は、「大学が出来て15年以上にもなるのに、近くにこんな素晴らしい学生さんがいることを初めて知りました」と喜んでくださった。学生たちが私にも黙ってお寺のトイレ掃除をして引き上げたと聞かされたのは、数日後のことである。

地域社会というかけがえのない演習室で、講義やキャンパスでは学び得ないことを、松岡ゼミ生が進んで学んでくれていることを、誇らしく思わないではいられない。